

鳥類の育児寄生—托卵—を巡る諸説

高須夫悟（奈良女子大・理）

育児寄生とは、自分で子育てをする代わりに、他個体に自分の子供の世話をさせる繁殖形態である。鳥類の繁殖では一般に、造巢、抱卵、給餌等、多大な親の繁殖努力が必要となる。自分の卵を他個体の巣に産み込むことで、こうした繁殖努力を回避し、他個体の繁殖投資に寄生する鳥類の育児寄生は、「托卵」と呼ばれ、托卵という現象自身は、その奇特性質ゆえ、古代ギリシャ時代から知られている。

托卵においては、托卵する側とされる側で、繁殖成功を巡る利害の不一致が存在する。托卵する側の托卵鳥は、托卵が成功しなければ子孫を残せない。そのため、托卵の成功率を高めるような形質・行動が進化してきたと考えられる。一方、托卵される側の宿主は、托卵を受け入れてしまうと自分の繁殖成功度が低下する。それゆえ、より効率良く托卵を排除する形質・行動が進化してきたと思われる。これまでの野外研究が明らかにしてきた、宿主の卵認識排除能力、托卵鳥の卵擬態等々、現在我々が目にする托卵鳥と宿主の姿は、両者が互いの適応度を最大化すべく軍拡競争的に進化してきた結果であると考えられる。

しかし、両者の関係は実際どのような過程を経て現在の姿に至ったのだろうか？ また、これから将来どのような結末に向かっていくのだろうか？ 本講演では、これまでに野外研究が積み重ねてきた知見を概観し、托卵鳥と宿主の関係の進化を理論的に取り扱う試みを紹介する。そして、フィールド調査や分子データを用いた実証研究と、数理モデル解析に基づく理論研究とのあるべき姿について展望する。